

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	評価・集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善計画書)
1 生徒の学習意欲を高める授業を 実践し、確かな 学力と筋道を立 てて書く力を育 成する。	① 生徒に興味・関心 を持って授業に取 り組ませ、学力向 上を図る。	教務課 全職員	授業がわかりやす いと感じる生徒の 割合が、 A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	評価がC、Dの場 合、授業方法及び 内容を検討する。	前期、後期に全 生徒にアンケート 調査	評価：B 学校評価アンケ ート(生徒)によ る肯定的評価は、 87%	学校評価の中間評 価では89%であ ったことから、A 評価も期待され たが、数値的に は前年と変化は ない。生徒によ る授業評価でも 、「授業に集中し ている」85%、 「授業は充実し ている」80%と 高い数値である ことから、授業 内容には満足が 得られていると 思われる。た だし、5%の生 徒が「あてはま らない」と回答 していることと 合わせ、次年度 の2年生からは 新コースがスタ ートし、新しい 科目も入ってく ることから、教 師の教材研究や シラバス作成な ども今まで以上 にしっかり行い たい。
	② 各種検定試験を 通して学習意欲 を高める。	教務課 商業科	3年生の1級3種 目の取得者が、 A 165人以上 である B 160人以上 である C 155人以上 である D 155人未満 である	評価がC、Dの場 合、指導方法及 び内容を検討す る。	2月に担当課で 集計	評価：A 最終集計は、 190名	1級3種目の取 得者が過去最高 190名となり、 A評価となっ た。1年間に受 験できる回数に 限られているの で、2年生まで の指導が鍵とな っている。今年 度の3年生は、 2年次の珠算電 卓、情報処理の 合格者の増加が この結果につな がったと考えら れる。
	③ ICTを有効に活 用した授業を研 究し、実践する。	教務課	ICTを有効に活 用した授業を実 践した教員の割 合が、 A 70%以上 である B 60%以上 である C 50%以上 である D 50%未満 である	評価がC、Dの場 合、改善策を 検討する。	前期に中間集 計、後期に最 終集計	評価：B 学校評価アンケ ート(教職員)に よる肯定的評価 は、65%	プロジェクター の稼働率が上が り、希望があっ ても利用でき ないこともある ため、今後は台 数の確保が課題 となる。予算措 置等の関係があ るが、教室で授 業を行う事が多 い1年生の教室 から常設のプロ ジェクターを設 置するなど環境 を整えることが 課題となっている。
	④ 授業やLHの中 で文章を書か せる場面をより 多く設け、「筋道 を立てて書く力 」を育成する。	各学年 教務課 各教科	「筋道を立てて 書く力が向上し た」と感じる生 徒の割合が A 80%以上 である B 70%以上 である C 60%以上 である D 60%未満 である	評価がC、Dの場 合、方法及び内 容を検討する。	前期、後期に 全生徒にアンケ ート調査	評価：C 学校評価アンケ ート(生徒)によ る肯定的評価は 、60%	中間評価は59% であり、数値的 にはあまり変化 はなかった。今 年度は新しく、 書き込みができ る新生徒手帳に 変えたこともあり 、今年度の重点 目標である「筋 道を立てて書く 力」の育成を計 画したが、割合 の伸びは感じら れなかった。書 くのみならず、 他者に口頭で伝 えることも大切 であり、事実、 ペア学習やグル ープ学習、発表 などを多く取り 入れている国語 ・理科・外国語 や家庭では肯定 的評価が60%を 超えていること を考慮すると、 今後は「書く力 」に限定せず、 養成する力を、 幅広く「伝える 力」あるいは「 表現する力」と して捉え直すこ とを検討したい。
学校関係者評価委員会の評価		「書く力」については生徒の自己評価が目標に達していないとのことだが、もう少し高く評価しても良いのではないか。特に新手帳は、前にあったことを振り返り次の行動を考えるツールとして有効であり引き続き活用を促進して欲しい。					
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		確かな学力を育成するためにも思考力・判断力・表現力を高めていくことは大切であり、今後、「書く力」はもとより、「論理的に伝える力」「論理的に表現する力」を高めていく方策を考えていく。					

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	評価・集計結果	前期の成果と後期への課題
2 ビジネスマナー教育、実践教育、国際理解教育、おもてなし教育の更なる充実に取り組む。	① 相手の顔と目を見たさわやかな挨拶を日常的に実践し、社会に貢献できる生徒の育成に取り組む。	生徒指導課 特活課	年間を通して相手の顔と目を見たさわやかな挨拶ができた生徒の割合が、 A 95%以上である B 85%以上である C 75%以上である D 75%未満である	評価がC・Dの場合、指導方法を検討	前期、後期に全生徒にアンケート調査	評価：B 学校評価アンケート(生徒)による肯定的評価は、 1年 88% 2年 93% 3年 93% 全体 91%	今年度、前期は公安委員や金商リーダー会の活動を通じて挨拶の奨励を行ってきた。また、9月から3年生の進路に向けた挨拶運動を皮切りに10月までクラス対抗という形で学年別の実施し、今年度は全員が挨拶運動に参加した。期間中は明るく元気よく挨拶する生徒が増えたように思えたが、日常的にはまだ定着できていない生徒も見受けられる。
	② 生徒指導が主となり、公安委員・生徒会執行部と協力しながら遅刻0の徹底を推進していく。	生徒指導課	遅刻0の日が年間を通じて、 A 100日以上である B 80日以上である C 60日以上である D 60日未満である	評価がC・Dの場合、指導方法を検討	年間を通じて調査	評価：B (1月末時点91日) 3月末までに目標を達成予定	1月末時点で遅刻0の日数が91日となっている。昨年と比較すると前年同期では86日と5日間微増ではあるが増加している。 昨年度から実施している生徒玄関8時25分登校が功を奏している形である。ただ、一部には遅刻を度々重ねてしまう生徒もあり、規則正しい学校生活を送るうえで時間を守る意識をさらに習慣づけ定着させていきたい。
	③ 実践教育とマナー教育の一環である金商デパートの運営に積極的に取り組む。	特活課	金商デパートにおいて、学校で学んだことを生かした生徒の割合が、 A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である	評価がC・Dの場合、運営方法を検討	金商デパート終了時に、全生徒にアンケート調査	評価：B 学校評価アンケート(生徒)による肯定的評価は、 1年 93% 2年 91% 3年 95% 全体 93%	今年度は全国産業教育フェア石川大会に合わせて、金商デパートを実施したことから生徒の意識もこれまで以上に高かったと思われる。全国産業教育フェアでは、1万人以上の来場者が全国から訪れるということが予想されたため、本校のおもてなしをアピールするため、様々な接遇マナー講座を実施した。その結果、これまで以上に意識も高まったと思われる。しかし、その一方でこれまでの金商デパートで行われていた特販行事がなかったことに対する3学年の物足りなさもあり、この行事を実践教育という枠組みの中で内容をどうするか検討していく必要がある。
	④ 英会話力育成の充実に取り組む。	英語科	1・2年生で全商の英検2級を取得した人数が、 A 120名以上である B 100名以上である C 80名以上である D 80名未満である	評価がC、Dの場合、英語が必要であることを認識させるために講話等の内容や機会を検討する。	全商の英検2級の合格者を調査	評価：D 第56回検定 32名 第57回検定 15名 総計 47名	夏季休業も利用し補習を行い、試験前にリスニング講座等を開いたが目標には遠く及ばなかった。 英語は今後もグローバル化に対応するために、生徒には必要不可欠なものであり、その指標として「全商英検2級以上」はそのまま使用したい。ただし、現実的な目標としては、「3年生までに取得する」ことを目指すこととし、「全校生徒の十数%程度以上の取得者を目標」に変更することを検討したい。
学校関係者評価委員会の評価		挨拶や遅刻なしの日数など大変高く評価できる。英語については、資格の結果のみに偏らず日常的に英語に興味を持たせていくことが大事。英語が得意でない生徒には、バリアを乗り越えさせるためにもそういう場面を日常的に設けることが必要であろう。					
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		主体的に学ぶ意欲を継続させるためにも、年数回ある英語関係資格取得・検定試験合格を一つのモチベーションとしていく。加えて、ハワイ・マッキンリー高校やシンガポール・テマセクポリテクニク校との交流を通じて、積極的に英語を使ったコミュニケーションを図っていく。					

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	評価・集計結果	前期の成果と後期への課題
3 生徒の希望する進路実現に向けて、各学年に応じた計画的なキャリア教育に取り組む。	① 企業ならびに同窓生と連携を深め、各種ガイダンス機能の充実と希望企業への実践的な面接指導を実施して、進路実現を図る。	進路指導課	ガイダンスや面接指導を通じて、希望の職種・業種への進路実現を達成できたという生徒が、 A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である	C・Dの場合、取り組みを検討	後期に就職希望の3年生対象にアンケートを調査	評価：B 学校評価アンケート(生徒)によると、肯定的評価は、93%	進路実現に向けて今年度は同窓生による講演会を2回実施。また、業者による進路ガイダンスを5回実施し、いろいろな情報を提供し充実を図った。さらに企業や卒業生を職種・業種別に招き、ディスカッションを重ねるなど就職に関する情報提供も行った。その結果今年度は、生徒の希望職種への受験が可能となった。同窓生による話し方講座など面接指導を徹底して行い、OB・ジョブカフェと連携しさらに強化を行った。次年度に向けてはさらにミスマッチがないように今年度の指導内容等を見直し充実させていきたい。
	② 補習やガイダンスの指導・働きかけを工夫、志望分野・志望校への進学意識を高める。	進路指導課	しっかりと目的意識と学習意欲を持って受験勉強に取り組み、学力向上に努めたと答えた生徒が、 A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C・Dの場合、取り組みを検討	後期に進学希望の3年生および1・2年生対象にアンケートを調査	評価：C 学校評価アンケート(生徒)によると、肯定的評価は、 1年 73% 2年 77% 3年 89% 全体 78%	学年が上がるごとに評価は上がっているが、全体としては78%ということでガイダンスや指導が3年生中心になっていることと関係していると思われる。 今年度は今までになく国公立大学の受験希望者が多く、個人指導・個人添削中心の指導を行ってきたのでそれなりの成果は上がったが、国公立大学合格率が50%に下がったのは反省すべき点であり、来年度は70%まで上がるよう指導を改善したい。 また、1・2年生のガイダンスの充実については課題であるが、今年度の反省を踏まえてどの時期にどのような形式で導入するかを就職担当とも相談してより効果のある方法を検討したい。
	③ 1・2年次より、計画的にキャリア教育を行ない、進路実現に向けた取り組みを充実させる。	進路指導課 各学年	希望する進路の実現に向けて、具体的な進路希望が設定できたと答えた生徒が、 A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C・Dの場合、取り組みを検討	後期に2年生対象にアンケートを調査	評価：D 学校評価アンケート(生徒)によると、肯定的評価は、61%	前年度の同じアンケート結果では74%の数値であったが、今年度は61%と大きく下回った。 前期は、就職希望者はインターンシップ、デュアルシステムを実施、進学希望者はオープンキャンパスの参加を実施した。後期には、2月に分野別模擬講義、「3年生と語る会」を実施した。 9月～2月までガイダンスなどが実施されていないことがこの数値になったと予想されるので、次年度は、生徒の進路希望を具体的に設定させることにつながる指導内容を考えていきたい。
学校関係者評価委員会の評価	キャリア教育については金商デパートへの取り組みが有効に活かされているのではないかと。1年次・2年次ではなかなか具体的な目標を立てるのは難しいので、3年生の経験談などを聞かせるなど身近な存在の活用を必要な場面で設定していくと良いのではないかと。						
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	キャリア教育が機能するよう、特に1・2年次の9月～2月に仕掛けを作っていくことを考えたい。						

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	評価・集計結果	前期の成果と後期への課題
4 心身の健康と豊かな人間性の育成に向けて、部活動、特別活動等の更なる充実に取り組む。	① 運動部の県大会において、優勝を目指す。	特活課	県大会でベスト4以上の運動部が、 A 9部以上である B 8部である C 7部である D 7部未満である	評価がC・Dの場合、指導を検討	大会報告書による調査	評価：A  9つの運動部活動が県大会でベスト4以上の成果をあげた。	今年度は常連の女子バレーボールの他、野球部、男子バレーボール部、ソフトテニス部、少林寺拳法部、バドミントン部、ソフトボール部、駅伝部、新体操部が上位に入賞した。 上記の部活動には入っていないが、ベスト4にあと一歩まで迫っている部活動もあり、その成果として女子の部活動として県の優秀賞を受賞することができた。 今後はメンタルトレーニングや食事面の講習会を行うなどして、学校全体でレベルアップを図りたい。
	② 文化部・商業部の県大会（総文・新人）において団体優勝のべ3競技以上を目指す。	商業科 特活課	県大会（総文および新人）で団体優勝をする競技が、 A のべ6競技以上である B のべ4競技以上である C のべ3競技である D のべ2競技以下である	評価がC・Dの場合、指導を検討	大会報告書による調査	評価：C  3つの競技において、県大会（総文・新人）で優勝する成果をあげた。	左記3競技は珠算競技、電卓競技、情報処理競技である。 ワープロ競技においては総文では優勝を果たしたが、新人では優勝を逃してしまった。 今年度は1年生において文化部加入者が多く、次年度は文化部の活躍が期待される。文化部活動においては、定期的に部活動を実施し、その成果発表の場を提供するなどして、生徒の意識を高めることが重要である。
	③ 各種委員会・生徒会活動及びボランティア活動等に自主的に取り組んだ生徒の割合が、	特活課	各種委員会・生徒会活動及びボランティア活動に自主的に取り組んだ生徒の割合が、 A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	評価がC・Dの場合、活動内容や取り組み方を検討	後期に全生徒を対象にアンケート調査	評価：B  学校評価アンケート（生徒）によると、肯定的評価は、 1年 71% 2年 74% 3年 70% 全体 71%	前期集計において72%であったが、後期集計では71%と少し下がった。 前期は各種団体が積極的に学校周辺のボランティア活動をしていたが、後期は雪の影響もありボランティア活動に参加する生徒が減少したのではないかと考える。 地域住民から本校に対して、雪かきボランティアの礼状が届くなど素晴らしい取り組みはある一方で、ボランティアにまったく興味を示さない生徒もおり、今後はボランティア活動の重要性について様々な場面で訴えていきたい。
	④ 校舎内の清掃をきちんと行い、節電・節水に努め、ゴミの分別をきちんと行う意識を全生徒がもち、自主的に行動することを目指す。	保健課	清掃をきちんと行い、節電・節水に努め、ゴミの分別をしっかりと行っている生徒の割合が、 A 98%以上である B 95%以上である C 90%以上である D 85%未満である	評価がC・Dの場合、指導を検討	前期、後期に全生徒にアンケート調査	評価：A  学校評価アンケート（生徒）によると、肯定的評価は、 1年 97% 2年 97% 3年 96% 全体 97%	アンケートの結果からも分かるように、全体的にゴミの分別はきちんとできるようになってきている。来年度は限りなく100%に近づくように更なる意識の向上を目指したい。 7月・8月・9月の電気使用量は、前年度をどの月も超えていた。天候、夏季補習等の増加によるものと考えられるが、常に省エネの観点に立ち、節度ある利用を指導していきたい。
学校関係者評価委員会の評価	部活動への取り組みとその成果には運動部・文化部・商業部すべてにおいて素晴らしい。戦績のみにとらわれることなく、高校生活を充実させるためにも引き続き努力を重ねてほしい。電気の使用などについては要所要所でその結果を生徒に知らせフィードバックしていくことが大切なのではないか。						
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	高校生活を豊かに充実させていくためにも、引き続き部活動には力を注いでいく。部活動の記録に留まらず、本校の諸活動結果を生徒に知ってもらうためにも、各部署からの便り（通信）の充実を考えてみたい。						